

生活文化のための教養教育の探求

須賀由紀子

生活文化学科 (非常勤講師)

Introducing the Ways of Liberal Education for Quality Life

Yukiko SUGA

Department of Human Sciences & Arts

The aim of this study is to consider the concepts of liberal education, which promote our quality of life in mature post-industrial society. At first, the author tries to grasp the meaning of liberal education in Western World, which is indispensable to study classical literature. Then the author pays special attention to two great classical literatures, i.e., *The Divine Comedy* by Dante and *The Tale of Genji* by Lady Murasaki, as the best works for liberal education. The author discusses about the values of them from such view points; 1) they can teach us the universal human nature as well as the importance of mother tongue filled with the cultural heritages, 2) they can show us the relationships between the words in classics and the works of fine arts, 3) they can tell us the power of classics to inspire individual modern lifestyle. At last, the author points out an education style in the Japanese tradition, which matured the noble women's mind by telling the best classical stories and *wakas* holding the Japanese fundamental soul. The conclusion is that it is very important to think out how to present and share the classics attractively and lively. The modern teaching materials by technological investigations, e.g., multi-media and IT contents, may be helpful for them.

この研究の目的は、現代の成熟社会にふさわしい生活文化を築くための教養教育のあり方について考察することにある。著者は、はじめに、西洋の伝統の教養教育の意味について捉える。そこでは、古典と教養が密接に結びついていることを確認する。その上で、教養教育の教材として、ダンテ『神曲』と紫式部『源氏物語』という二つの偉大な古典をとりあげ、次の観点からその価値を考察する。1) 古典は、人間の本質とともに、文化の伝統を踏んだ母語の大切さについて教えてくれるものである、2) 古典の中の言葉と芸術作品の間には深い関わりがある、3) 古典の言葉は、現代の暮らしの創造にインスピレーションを与えてくれる力を持つ。最後に、著者は、日本の伝統における、ある教育スタイルについて取り上げる。それは、日本人の根源的な魂を孕む優れた古典の物語や和歌を語ることによって高貴な子女の心を育むという方法である。結論は、古典をいかに魅力的に生き生きと伝え、分かちあうかを工夫することが非常に重要だということである。現代の技術革新が生み出したマルチメディアやインターネットを活用した教材などは、そのために有効な手だてとなるであろう。

Key words : Liberal Education 教養教育、Classic 古典、*The Divine Comedy* 『神曲』、*The Tale of Genji* 『源氏物語』、Quality Life 生活文化

1. はじめに

生活文化の創造、すなわち生活の質の探求においては、文化・芸術を楽しむ暮らしを心深く実践することが大切な要素の一つとなる¹⁾。しかしながら、人生の壮年期、生活に必要な営み(仕事や生存のために必要

な衣食住の基本生活)の負担や責任が増えると、余暇・休日は、日頃疲れた身体を休め、ストレスのたまった心身を解放し、次の仕事の日に向けてのエネルギーを補給するためのものとなり、文化や芸術に触れて自らの精神を高めるような時間は失われがちにな

る²⁾。

人としての暮らしの成熟に大切な文化・芸術のための時間を、「生活必需」の時間をさしおいても守ることができるようになるためには、文化・芸術が「人間として生きる」という暮らしの中でいかに重要なものであるのかについて、本質的な考え方を習得しておかなければならない。その上で、旅やアート、スポーツ、音楽、演劇といった文化・芸術活動の創造や享受を、真にその人自身の人間的な心の成長・成熟と結びつけていくライフスタイルのプロデュース能力を身につけておくことも必要である。「人間として生きる」にあたってのものの見方を形作る大学教育はその役割の一端を担うべきであり、その意味で、職業に結びつく「専門」としての文化・芸術教育のもう一方で、「暮らしの教養」として文化・芸術の価値を深める心を育むことは大切である。

本稿では、そのような観点から、生涯にわたって享受していく、いわば「人生の楽しみ価値」としての文化・芸術の魅力に誘うための教育について考える。具体的には、西洋の文化・芸術創造の源ともいえるイタリアのダンテ『神曲』と日本の文化・芸術の柱の一つ紫式部『源氏物語』を事例として、生活文化のための「暮らしの教養としての文化・芸術教育」のあり方を求めての論考を行う。

2. 暮らしの教養と古典の関わり

2.1. 教養の本質への問いから

今日、「暮らしの中の教養」といえば、たとえばカルチャーセンターは隆盛を極めており、博物館や美術館や図書館などの文教施設では趣向を凝らした様々な講座が開かれており、また大学も公開講座や通信教育に力を入れるなど、誰でも「学びたい」という気持ちになれば、いつでも気軽に勉強することのできる学習社会が広がっている。しかしながら、そうした学習機会の享受が、表面的な知的洗練に留まるだけで、学習者の生き方や考え方を内面から深く支えるようなものにならなければ、真の教養とはいえないであろう。

教養とは一体人間にとっていかなる価値を持つものなのだろうか。ここで、本稿における捉え方を示しておきたい。

教養論は論者の立場により百花繚乱であり、そのすべてを検討しつつ、「教養とは何か」を論じることは、

本稿の目指すところではない。本稿では、「教養の原型ないし模範は、しばしば15・6世紀ルネサンスのヒューマニストが追求した人文学(studia humanitatis)に求められる。教養とは人文学を通じての人間性の実現をめざす営為としてのヒューマニズムである³⁾という西洋の伝統的な考え方をもとに教養の意義を捉える⁴⁾。

教養の価値を問うにあたっては、そもそも「人間とはどういう存在であるのか」ということから見つめなければならない。上述の立場においては、「人間は超自然の価値へと開かれる存在である」との前提に立つ。すなわち、人間は、生命を維持し生殖活動を行うといった「生きる」ことに関わる生物的存在様式を持つと同時に、目に見えない形而上の価値へと向かう精神を持つ。人間の人間らしさ(人間本性)は、超自然の価値へと開かれた存在として、その精神を働かせ、生涯かけて実現されてゆく。教養は、この形而上の高みへと人間精神を向かわしめる行為に関わるべきものであり、人間の精神を真の自由の道へと導くものである。

このような見方に立てば、教養とは、即時的に役立つ技術や技能を習得するための営みではなく、「人間として本来あるべき姿とはなにか」を大局的にとらえ、人間本性の実現と完成に向けて、身につけた知識や技能を働かせるその根源となる力なのである。

従って、教養は、「人間として生きる」上で大切な必要条件であり、それは生涯にわたって続けられるべき「人間である」ということに向けての学習ととらえられるのである。

2.2. 教養の幹としての古典の価値

ところで、ヒューマニズムとは本来「古典的な学芸の研究を通じて人間本性の形成をめざす営為を意味する⁵⁾」ものであり、従って教養の柱となすべきは具体的には「古典的な自由学芸の享受」ということになる⁶⁾。

ここで「古典」とは、単に「古代のもの」「古いもの」を指す言葉ではなく、「永遠の価値実現の指標となりうる、すなわち、永遠の価値に向かふための基礎的な模範的な道の性格を『古典的』といふ⁷⁾」のである。先に述べた「人間本性は形而上の価値へと開かれ完成されていくものである」という考え方に基づけ

ば、人が、「ただ生きる」のではなく、「よりよく生きる」⁸⁾ためには、「永遠の価値」へ憧憬の念を抱き、そこに照らして自らの「あり方」を振り返り⁹⁾、実践の行動に反映させていくことが大切である。この「何時の時代の何処の人にも、価値実現の指標となるところの、それ自身価値の高い典範を探し求め」¹⁰⁾、それをもとにして、「永遠を想ふ」¹¹⁾ことが、「超自然の価値」へと開かれる、人間本性の成熟と完成に向けて相応しい行為の基礎を作る。

「人間的」であることの根源的な意味は、「理性や意志を持っている」ということに特徴づけられる。理性すなわち言語に基づいて、人間として生きることの究極の価値を探求し、その価値に基づいて強い意志をもって行為できるようになることこそ、「人間的に生きる」ことの意味内容をさす¹²⁾。そうしたヒューマニズムを鍛え、高めるためには、やはり教育が必要であり、その教材として最も相応しいものが、永遠の価値を指し示す努力が払われた古典の作品なのである。このように、「永遠」への憧れとその価値に根ざした自己のあり方の探求こそ、われわれが「教養」として古典に学ぶことの本質なのである¹³⁾。

人生に力を与えてくれる古典は、書物ばかりではなく、音楽、造形芸術、伝統芸能など、様々な芸術ジャンルがある。「時代によって価値が移ろうことなく、時代を越えて正当な模範となり、人々の思いを高め、創造や勉強や鑑賞の基礎となる作品を古典と呼ぶ」¹⁴⁾のであるから、そうした音響芸術・造形芸術の世界から「永遠の価値」へアプローチすることも、もちろん可能であるが、しかし、すべての芸術を生み出す源には理性すなわち言葉があるのであり、「言葉を持つ(言葉を介して、その豊かな内面、「思う力」を自己表出する)」ということこそ、人間が理性的動物であることの一歩の象徴、「人間であること」の一番の特徴を示す事柄であるから¹⁵⁾、「古典的」なものに触れるにあたって、古典とされる書物をその素材とすることが、やはり最も基本的な基盤となるであろう。

そもそも、「古典」という言葉の由来を尋ねれば、「古」は、「歴史や歳月の試練を経た蒼古」の意味であり、単純に「古代」をさすのではない。そして「典」とは、「冊が机上にあること」を表示する象形文字であり、「尊重されて卓上におかれた価値の高い書物」の意味である。それは、「第一級の書物の群れ」を指

す、ラテン語のクラシクス(classicus)に対応するという¹⁶⁾¹⁷⁾。

従って、「形而上の価値へと開かれる人間の精神の結晶」とも言える古典の言葉を、日常の生活とは離れた遠いものとして追いやるのではなく、日々の生活の糧とする。そのことを通して、その古典の言葉を内面化する。それは、われわれ一人ひとりの小さき存在を、少しでも高みへと近づけ、自らの精神を磨き、人格美に充ちた「人間本性」の完成に向けての営みの道の実践へと導いてくれることであろう。特に、われわれが課題とする生活文化とは、まさに「よりよく、より美しく、より幸福に」と暮らしを作っていく営みであり、そこには、精神性高く磨かれた美しい心が深く関わってくる。古典の言葉が、永きにわたって人々に力を与え続けてきている、ということは、その中に、人間として生きることの真実の美に誘われるその意味の深みがあるということであるから、そのことに、まさに言語を介して、すなわち理性を介して引き寄せられ、近づく営みは、美しい心を育む上で、最も大切な手だてではないか。このように考えていくと、「ヒューマニズム」すなわち「人間らしさを尊重する」ということにおいて、古典が最も大切にされることの意味も理解され、「暮らしの教養」としての古典を身近にすることの重要性が示されるであろう。

一方、「母語と民族の心」という観点からも、暮らしにおける古典の言葉の価値を指摘しておかなければならない。母語とは、生まれてから、自分を養育してくれる周りの人々の声を聞きながら自然に身につける言葉である¹⁸⁾。母語の中には、その土地の風土や民族の歴史に根ざした言葉の意味やイメージが拡がっており、豊かな母語を身につけることは、自らが生まれおち、生活を築いていくその基盤となる文化風土を確かな心の支えにできるということにつながる¹⁹⁾。その意味で、「帰るべき心の故郷」を育むのである²⁰⁾。長じて、様々な外来の文化や新しい考え方に接しても、心の根底とするところは動かない。むしろ、大地にしっかりと根をはやしているからこそ、新しい革新的な知識や情報も栄養分として取り入れ、精神の幹を太らせ、豊かな実りある、そして、その下に憩う人々にも恵みを与えることのできる大樹へ成長することが期待されるのである。反対に、根っこや土壌が貧弱では、いくら栄養を与えても大きく育つことができない

い。

民族の言葉の重みは、アイヌ民族の言葉・生活文化の発掘と継承に大きな仕事を為した萱野の次の言葉に代表されよう。「民族固有の文化のうち、それを奪われることが最も致命的で打撃となるのは何でしょうか。それは着るものでも、住まいでも、食べ物でもありません。それは毎日話をしている民族それぞれの言葉です。ある民族から固有の言葉が奪われ、失われる時、その民族の文化は最も重大な危機をむかえるのです。今後アイヌ民族が混血を繰り返して、すね毛や胸毛が消え落ちてしまっても、言葉さえ残っていれば文化は滅びないと私は信じています」²¹⁾

われわれ日本人は、古人の心を引き継ぐ言葉を現代に有する、大変恵まれた民族である。古典の文献に残された言葉は、日本人のルーツにある心を現代に伝えてくれる。従って、「日本の古典」を身近に感じ、古の人々へ思い寄せながら、それを生活の糧とすることは、民族としての生き方、日本人として大切にすべき価値観を育む上で、とても大切なことであろう。それは、偏狭な民族主義ということではなく、現代社会の狭い囚われの状態からわれわれの精神を解き放ち、過去のよきものを取り入れ、新しき暮らしを作っていくことへ誘う、その原動力となるはずである²²⁾。

このように、「人類普遍の道しるべとなる」という意味においても、「自らが生まれ落ちた文化風土の中で生きる心の基礎を育む」という意味でも、古典の言葉がいかに大切なものが明らかにされる。古典の言葉の襲に分け入り、そこに自分自身の精神を重ねる営みは、生活全体、人生全体のとらえ方を広げ、「よりよく生きる」ことへと導く底力となるのである。

以上、「暮らしの教養と古典の関わり」についての基本的な考え方を基盤におき、次節において、具体的な題材、すなわち西洋の古典の代表としての『神曲』と日本の古典の代表としての『源氏物語』を例に引きながら、古典の言葉を「暮らしの糧」としていくことの意義について論考をすすめる。

3. 暮らしの糧としての古典の力

3.1. 教材としての『神曲』『源氏物語』の価値

3.1.1. 『神曲』に関する辞書的知識

『神曲』は、14世紀初頭、ダンテ・アリギエーリによって書かれたイタリアの国民文学であり、西洋古典

文学を代表する作品の一つである。祖国フィレンツェの政治指導者としての人生を順調に歩み、その頂点を極めようとしていたダンテが、政変に敗れて祖国から永久追放を命ぜられ、その失意の中で、ダンテ自身の精神の拠り所を求めて書いた壮大な叙事詩である。その詩は、「神語を人語に写し取って表した」とされる西洋叙事詩の祖ホメロスから、ローマ建国の神話を自らの詩才で刻んだ古代ローマ詩人・ウェルギリウスへと至る²³⁾古代ギリシア・ローマの古典文学の伝統を踏み、思想的には、アリストテレス、アウグスティヌス、そして中世最大の神学者トマス・アクィナスという、古典古代の伝統とキリスト教の流れを基盤に置いた作品である。フィレンツェを追われたダンテが作中人物となり、彼の詩才の拠り所、ウェルギリウスを先達として地獄から煉獄を巡る。そして最後の天国においては、彼に真の愛の道を指し示すべく、ダンテの永遠の恋人・ベアトリーチェが道案内者となって天界の旅をする。「地獄」においては「神の正義」が罰する人間の悪の姿を描き、「煉獄」の世界では、当時まだ新しい概念であった煉獄²⁴⁾の世界の姿を大胆にも描き出して後世への影響を大きく残し、「天国」では厳しくも愛に満ちた「神の正しき道」の真理を考えさせる。その壮大で緻密な構成のすばらしさとともに、詩の言葉・リズムの美しさ、そして、言葉の一つひとつに盛り込まれた思想の深さ、人間知性の結晶とも言うべき想像力の見事さ、これらの故に、ダンテは「詩人哲学者」と称される²⁵⁾。後世の人々の心を打って今日に至る不朽の名作である。『神曲』は日本人にも愛され、数多くの邦訳がある²⁶⁾。

この『神曲』の文化へ与えた影響として特筆すべきは、当時芽生えていた清新体派²⁷⁾の表現に倣い、文人が書くものはラテン語とされていた時代の中で、抽象的・概念的なラテン語ではなく、心の内を細やかに表現することができる、ダンテにとっての母語・トスカーナの言葉で書いたという点にある。それがいかに冒険的・革新的なことであったかは、ダンテのこの作品が「ラテン語ではなく、俗語のトスカーナ語であるとは残念だ」ということで、それが低く見られていた時期が長く続いたということからもうかがえる²⁸⁾。しかし、このことにより、『神曲』はイタリアの国民文学としての地位を得、後のイタリア・ルネサンス芸術、ひいては宗教改革の運動を生み出した、西洋文化の記

念碑ともいえる作品なのである。

こうしてわれわれは『神曲』を通して、中世からルネサンスへという流れの中で完成されてきた西洋文化の姿を知ることができる。そのことを通して、西洋の人々のものの考え方、西洋文化を支えている西洋の知性の幅の広さや深さを知ることができる。同時に、その思想の深さゆえ、東洋西洋の区別なく、人類共通の知的遺産として、人間として生きるにあたって大切な普遍的に考えるべき思想を学ぶこともできるのである²⁹⁾。

3.1.2. 国学からみた『源氏物語』の価値

一方、『源氏物語』については、今から千年の昔に書かれた、日本を代表する長編古典文学であることは、あらためて記述する必要はないであろう。

『源氏物語』は、その成立以降、藤原定家をはじめいろいろな写本や注釈書が出され³⁰⁾、あるいは和歌を詠むためには『源氏物語』を深く知らなければならないという伝統が培われた³¹⁾その一方で、風俗淫乱の書として僧侶や儒学者たちから批判され否定されてきたという歴史がある³²⁾。それが江戸時代になって、本居宣長を中心とする国学の研究の中で、非常に重んじられることになる。宣長は、『源氏物語』の中の細やかな心のありようを読み込み、そこに「もののあはれ」を読み解き³³⁾、日本の文芸論を説いた。その流れを汲み、明治から大正にかけて活躍した、「国学最後の人」とも称される三矢重松は、「価なき珠をいだきて知らざりし たとひおぼゆる日の本の人」という歌を詠み、「天下に比類のない優れたたま（源氏物語）を抱いておりながら、その伝統的な良きもの、すぐれたものの価値に気づかないで、外来のものにばかり心うばわれる日本人はあはれなものだ」という心を示し、源氏物語の文学的価値を世に知らしめる公開講座「源氏物語全講会」を國學院大學において行ったのであった³⁴⁾。それは、その弟子折口信夫へと引き継がれ、折口は『源氏物語』の中に歌物語の心を読み解き、宣長の「もののあはれ」をさらに発展させて、日本の尊き男女の愛の根底に古代の神話から引き継がれた「いろごのみの道徳」とも呼ぶべき生活の理想像があったのだということを示したのであった³⁵⁾。

この国学からみた『源氏物語』の価値とは、現代人の感覚や価値観で『源氏物語』を読んで評価をくだす

のではなく、『源氏物語』が描き出した平安朝の生活の中に、文字以前の古代から続く古人の心が引き継がれていると考え、その言葉の中に、日本人が大切にしたい生活の理想（モラル・センス）を発見する糸口を見出し、日本人の根生いの心をたぐり寄せ、掴みとっていく³⁶⁾。そして、古代から続く雄大な時の中に、現在を位置づけ、これからのわれわれのよりよい生き方に反映させていく、という営みである³⁷⁾。そういう目からみれば、現代の我々の営みは、大海の中のひとしづくのようなものであり、「自分らしさ」「新しさ」といっても、それは小さなものでしかない。むしろ、古人から引き継がれる大きな精神の柱を根底にすえて、そこに身を沿わせるところにこそ、日本人としての「あるべき生活」を創造する心が育まれると考えるのである。

ところで、『源氏物語』は歌（和歌）と物語を核にした日本人の伝統文化であり、その価値を理解するには、歌の伝統を知らなければならない³⁸⁾。一体、歌の中に、日本人が心込めてきたものは何か。歌はそもそも、日本人にとって何であったのか。この問いについて、折口信夫は「うたの始原は海の彼方の魂のふるさと（常世）からもたらされた、生活の根源の力を持つ呪的な言葉である」と言い³⁹⁾、それを受けて岡野は「歌とは生活の祈り、祝福、魂のしずめのための力ある言葉としらべ」⁴⁰⁾という。そういう日本人の歌の本質に心届いて始めて、物語の中の歌が生き生きと立ち現れてくる。そして、日本人にとっての歌の心を知るためには、古く遠い時代の歌の根源の姿や情熱を強烈に持っている『万葉集』を繙かなければならない⁴¹⁾。また、神話から物語へとつらなる日本人の心の源を描き出す『古事記』の姿も知らなければならない⁴²⁾。『古事記』は、大国主や倭建神話に見られるように、英雄とその魂を太らせる役割を果たす高貴なる女性が、魂を働かせあい、歌を交わしあって展開する「いろごのみの道徳」に満ちた物語である。『源氏物語』は、こうした『古事記』の心と形を引き継いで描かれているのである。

このように、『源氏物語』を古代の心、日本人の根生いの心へと遡る一つの「窓口」として捉える見方を知れば、『古事記』『万葉集』『伊勢物語』などといった日本の古典が、日本人の精神の大きな流れを繙く言葉としてわれわれの暮らしに近づいてくる。

「暮らしの教養」という立場からみれば、緻密な研究の対象として古典に接する必要はない。原典の言葉に静かに触れて古人に思い寄せながら、言葉の中にある日本人の心の奥の心性に心馴染ませていく。昔びとの純粋で細やかな心に接し、脈々とつながる日本人の精神に身を沿わせながら、自分の言葉を磨き、精神を磨き、心深めていく。われわれは、『源氏物語』をただ「文学全集」の中の一冊にとどめおくのではなく、自らの心の柱を築く言葉として味わい深めることができるのである。

3.1.3. 古典の芸術文化開発力

加えて、両作品とも「文学としてある」というだけではない。美術、彫刻、音楽、舞台芸術等、古典的なものを含めて、現代においても多大な影響を与え続けている。従って、われわれは、古典の言葉を学ぶだけではなく、これら芸術世界への関わり方を深めることを通して、「永遠の価値」への憧れに導かれることができるのである。

たとえば、『神曲』で言えば、物語の挿絵を作品化した芸術家に、ボッティチェリ、ギュスターヴ・ドレ、サルバドール・ダリ、パイロス、ウィリアム・ブレイクらがいる。彫刻家ロダンも、『神曲』から得たインスピレーションをもとに《地獄の門》の制作を行った。ロダンは、仏訳『神曲』をいつもポケットに入れて愛読し、門制作の依頼を受けて以降、死の年まで40年にわたり改造を続け、結局この門は生前に鑄造されることはなかったという⁴³⁾。古典の言葉は芸術家の情熱をかきたて、《地獄の門》にはめ込まれた人物像の中からは、単体の独立した作品も鑄造された。特に有名なものに、《地獄の門》の上方で地獄の人々の様子を見下ろして考えている人物（ダンテその人を表したとされる）としてはめ込まれた《考える人》がある。

クラシック音楽のジャンルでも『神曲』を主題とする作品があり、たとえば、チャイコフスキーやリストなどに、有名な曲がある⁴⁴⁾。そして現代においても『神曲』は芸術家のインスピレーションを刺激し、芸術表現の主題として影響を与え続けているのである⁴⁵⁾。

一方、『源氏物語』ももちろん、様々な芸術文化の楽しみが広がる。たとえば、国宝源氏物語絵巻、源氏

絵、蒔絵、浮世絵などの鑑賞、舞台の世界では、能や謡、舞踊などの伝統芸能、能と現代舞踊との混交、人形を使った芸術舞台、交響曲、ミュージカル、オペラなどの音響芸術世界、朗読の舞台芸術等の鑑賞の楽しみが広がるのである。

このように、時の風雪を越えた古典文学は、古今東西の芸術家の創作意欲をかき立て、新たな芸術表現を創造させる力を持つ。われわれは、こうした作品を味わうことを通して、古典の言葉の魅力に触れていくことができる。なぜならば、古典を主題におく芸術作品の奥深い味わいは、古典の言葉を正しく知ることから始まるからである。古典的な作品から現代作家の作品に至るまで、それらを享受する力を身につければつけるほど、古典の言葉が暮らしに近づいてくるのである。

3.2. 古典の力の実際

3.2.1. 人類に普遍的に響く言葉の力

では、古典が、どれほど力ある言葉として響くものなのか、あるいは、民族の心のルーツを訊ねる上で大切なものなのか。次に両古典の中から具体例を示してみたい。

まず、ダンテ『神曲』の中から、地獄篇・第三歌の最初の九行「地獄門碑銘」の言葉について取り上げよう。『神曲』は、均整のとれた全篇の構成の中に、力ある美しい言葉がみなぎる古典であるが、その美しい力ある言葉の中でも、最も印象深い言葉の一つとされる⁴⁶⁾。ここにそれを引用してみる⁴⁷⁾。

Per me si va nella città dolente,
per me si va nell'eterno dolore,
per me si va tra la perduta gente.
Giustizia mosse il mio alto fattore:
fecemi la divina potestate,
la somma sapienza e 'l primo amore.
Dinanzi a me non fuor cose create
se non eterne, e io eterna duro.
Lasciate ogni speranza, voi ch'entrate. (*Inf.* 3. 1-9)

われを過ぎひとはなげきの都市に、
われを過ぎひとは永遠のなげきに、
われを過ぎひとは亡者にいたる。
正義は至高の主を動かして、

神の権能と最高の知と
 原初の愛とがわれを創った。
 われに先立った被造物とは
 永遠のものだけでわれ永遠に立つ。
 ここに入る者望みを棄てよ。(今道友信訳)

重々しい言葉の響きの美しさに、意味を解して浮かび上がる詩美が醸し出される。ここでダンテは、それまでに誰もしたことのなかった地獄の定義を詩に表現しているのである。すなわち、そこは「滅びの人たちによって満たされた都会のようなところ」であり、このような地獄を作ったのは、聖三位一体の神の正義であるという。なぜそれを作ったかという、人間に救いの道、正しき神の道を示し、その道を歩むことへ誘う神の愛である、とこの詩は語る。「愛」が地獄を作るといふ、逆説的な響きが、神の道の重さを示す。そして、「ここに入る者、一切の望みを捨てよ」という恐ろしい言葉で碑銘を締めくくる。すなわち、地獄は、厳しい責め苦に充ちた所であることはもちろんだが、「一切の望みが無い、絶望の府である」という定義が、強い言葉で示されているのである⁴⁸⁾。

この地獄門碑銘の言葉の重みを、今道は次のように解説している。第一に、この碑銘は、「希望がある」ことの恵みを深く思い知らせるものである。地獄は、この世のかなたの向こうの方にあるのではなく、現世の生活と背中合わせにある。なぜならば、ダンテの定義に従えば、日々生きていく中で、本当に一筋の希望もないという状態に陥ってしまうならば、それは「生き地獄」となるからである。つまり、ダンテの地獄は、「希望」が人間の実存に関わる、最も大切な徳の一つであることを示している⁴⁹⁾。第二に、地獄門は「われを通して、地獄へ至る」と繰り返して語る。この「われを通して」の Per me (=Through me) という言葉を繰り返して口ずさむうちに、その言葉が力をもって口ずさむ者の内に入り込んでくる。「われ」とは地獄門を指す言葉だが、あたかもこの「われ」は、この言葉を今読んでいく自分であるかのように思われてくるのである。すると、私を通して希望を失わせた人はいないか、精神の地獄へと追いやった人はいないだろうかという思いが湧いてくる。その反省は、教え導く立場にある者の普遍的なあり方への深い内省を呼び起こす。この言葉は、教師が生徒を導くとき、

あるいは親が子どもを導くときに、希望の道を示し共に困難を乗り越えようとする姿勢の大切さを考えさせるものなのである⁵⁰⁾。

このように、偉大な古典の言葉は、ただ表面的な字義通りに意味を受け取るだけでなく、重層的にその意味を解釈して深め学ぶ価値がある。そして、ひとたび、深い意味をもって言葉を見つめることができるようになれば、精神の支えの言葉とすることができる。人間の精神の結晶である古典の言葉だからこそ、その力を持つのである。

3.2.2. 民族の心のルーツを孕む言葉

一方の『源氏物語』の中には、われわれ日本人の心の源流を探索することができる。

たとえば、六条御息所という一人の貴婦人と光源氏の物語がある。六条御息所は、「嫉妬のあまりものけとなって現れ出て、光源氏の正妻・葵の上にとりついて苦しめ、死に至らしめた恐ろしい女」というイメージが強く、その心の深さについて理解されることが少ない。六条御息所を理解するためには、「ものけ」「生霊」といった霊的存在について知り⁵¹⁾、同時に、古代の高貴な女性が持っていた「うはなりねたみ」の物語⁵²⁾や激しい怒りの物語の伝統を知ることが必要である。六条御息所は単に恐ろしい女なのではなく、教養高い心深い女性であり、御禊の日の車争いで受けた屈辱の思いを「影をのみ御手洗川のつれなきに身の憂きほどぞいとど知らるる」という教養深い歌に詠む。そして、光源氏と自分の心のすれ違いに悩み、葵の上のすぐれない様子を聞くにつれ、「もしかしたら、人がうわさするものけとなって自分が葵の上に取り憑いているのかもしれない」と煩悶し、そのことを自らも確かめられたときにおののき、深く動揺する。しかし、その魂の大きさは、どうしようもなく、生身の夢うつつのまま、魂が「あくがれ出て」葵の上に取り憑いてしまうのである。そのくぐり、嘆きわび空に乱る我がたまを結びとどめよしたがひのつま」という「たま」の歌う哀しい歌のしらべにのせて歌われる。やがて、六条御息所は都から身をひくことを決し、伊勢の斎宮となる娘とともに伊勢下向のための潔斎にこもる。その六条御息所を訪ねる光源氏を描いた有名な「野宮」の場面は、六条御息所の気高く、しかし脆く哀しい心と、六条御息所の大きな魂を受け

とめきれなかった七歳年下の若き光源氏の精一杯なまでの心づくしの「いろごのみ」が描かれた印象深い場面なのである。

このような印象的な場面だけでも原文の言葉を丁寧に辿り、選り取られた大和言葉の背後にある古人のありように心沿わせていると、『源氏物語』の中から、昔日のものあはれの心、繊細な美しくまっすぐな心が響いてくる。それは、自らのルーツとなる言葉と心の響きである。こうして大和言葉を豊かに心に刻み、その中にある細やかな心や美意識に心馴染ませることは、その脈絡に連なる現在の暮らしを愛する心も育むことにつながるのではないだろうか。

3.2.3. 言葉の力と芸術

古典は、言葉自身を直接読んでその豊かな力を体得することが第一であるが、同時に、言葉に刺激され、そこからインスピレーションを得て、芸術家のセンスと技能で描き出されてきた芸術作品群を鑑賞する奥深い楽しみが重ね合わされる。そのことの例を『神曲』の中から見てみよう。

『神曲』における好例は、ロダン《地獄の門》であろう。この作品を、先に述べた地獄門碑銘の言葉を理解した上で鑑賞する。すると、芸術の力と古典の言葉が相まって、作品が身近にせまってくる。たとえば、《地獄の門》に刻まれた「ウゴリーノの悲劇」の姿を見ながら、その場面の『神曲』の言葉を読む。すると、「裏切り者同士が憎しみあってお互いの頭蓋骨にむしゃぶりついている」⁵³⁾という恐ろしいダンテのインスピレーションと、その事の由来を語る人物・ウゴリーノ伯の挿話に出会う。それは、幼きわが子とともに幽閉された室の中で、「この肉着せたはあなた、剥いでよ！」(地.33.63)「父さま、どうして助けなさらぬ？」(地.33.68)という子どもの悲しい言葉になすすべなく、最後には自分の目の光も奪われて子どもの遺体を手探りで探しながら、子どもの名を呼び続けながら死んでいく、心えぐられる悲しい光景である⁵⁴⁾。現代も地球上で多くの人々が苦しみの声を上げている飢餓の問題や、親子の愛・絆を考えさせる場面である。このような文学の言葉と響き合う芸術の姿に触れるとき、作品を前にして心は静かにその奥深さに感じ入る。そして古典の言葉を芸術家がどのように受け止め、形として表現したのかを見る楽しみが深まる。

このように、『神曲』に導かれた芸術作品を、主題となっているテキストの言葉を重ね合わせて理解していくという営みは、古典の楽しみ方を大きく広げることになる。

同様のことは、『源氏物語』においても指摘できる。たとえば、上述の六条御息所の主題に限定しても、能「葵上」「野宮」地唄「葵上」、上村松園画「焔」、三島由紀夫の戯曲「葵上」、ホリヒロシ作人形「六条御息所」などの芸術世界がある。これらの作品を、言葉に宿る六条御息所の心を背景にみるができるようになれば、生活の中の古典の楽しみが大きく広げられるであろう。

3.3. 古典から広がる生活文化

3.3.1. 個性的な旅スタイルの創出

古典が内包する意味の重みや深さ、芸術との関わりを言葉自身の中に感じ取っていくにつれ、古典は人が生きる上での精神の柱を築く重要な意味を帯びてくる。さらに、自らの生活創造の中心価値に位置づく時、古典が暮らしに生きた形で歩き出す。それは、具体的には、どのようなライフスタイルを生むであろうか。

たとえば、深める価値ある旅スタイルの創出である。旅をするとき、ただ漠然と行くのではなく、その土地の風景に、背後の歴史、過去に生きた人々の息づかいを感じながら関わられるようになると、その旅が、人生の中での「意味ある時間」として凝縮する。

ジンメルは、どこでも見られる普通の自然や生活の風景が、フィレンツェの町においては、独特の意味を持って見えてくることを指摘し、それは、その町で培われた精神の歴史が「総括的な美」を創り出しているからであると指摘する⁵⁵⁾。この「総括的な美」の源には、イタリア・ルネサンス芸術の数々がある。その芸術に、精神の息吹を吹き込んだ一人として、ダンテは間違いなく挙げられるであろう⁵⁶⁾。中世の時代にあつて、古典古代の伝統を踏み、イスラムの影響も受けながら、キリスト教の広大な神学世界を詩的な言葉で築き上げたダンテ。それまでの常識を破り、文人の書き言葉のラテン語ではなく、俗語のイタリア語・トスカーナの言葉を選び取って、内面の表現を細やかに語ることへの冒険をおこなった人である。そのダンテを生み、ダンテの精神を引き継いで花開いたイタリア・

ルネサンス芸術が今に残るフィレンツェの町並みを歩くとき、その源にあるダンテの世界を、心の柱に持っているのと持っていないのでは、「町」の風景の後ろに見えてくるものが違う。ダンテの詩を一つでも心に持つことができれば、その風景は、その町固有の風景となつて、意味を持って近づいてくるであろう。すると、その旅に向けての準備も日々の楽しみになる。

フィレンツェの町並みにおいて語れることは、『源氏物語』を生んだ故郷・京都においても同じように語ることができる。京都の町並み、山並み、川の流れ、神社仏閣の閑かな佇まい、宇治や伊勢へと至る道々、それらの風景の背景に、『源氏物語』の言葉がこだまする。さらに、『源氏物語』が生み出された背後には、日本人の長い長い、神話から物語へと流れつく心の伝統があるのだということに心届くとき、風景の背後に宿る言葉の精霊たちのささやきやざわめきが古代から蘇ってくる。こうして、京都の町にたたずみ、心静かに日本の古人の心の流れに自らの心を交わしあうとき、何ものにも代え難い濃密な時がそこには流れ、自らの出自を遠い古に重ねることのできる民族である幸せを感じ取ることができる。このような恵みに浴することができるのも、われわれ日本人が、母語・やまとことばの世界を古から持ち続けているからである。そのことの恵みに、京都の町は、そして『源氏物語』は、気づきをもたらすきっかけとなるのである。

このような旅のデザインができれば、旅先で過ごす一日は、遠い過去からの時間を込めた 24 時間となる。その時の厚みを感じられることは、われわれの心を大きく広く豊かなものにしてくれるであろう。

3.3.2. 美的精神に満ちた暮らしの創造

先のロダンの事例で見たように、古典の言葉に力があると、その言葉を主題においた芸術作品もまた奥深く、美しく、人の心をうつ力強さがある。従って、古典の言葉の意味を背景において、そうした作品を心深く鑑賞する心の習慣を育むことは、芸術への関わり方を深め、暮らしの中の文化・芸術の時間の価値を高め、美しいものを大切にする心、暮らしの美意識へと反映されるであろう。

一方、現代の作家達が『源氏物語』に感化されて表現する世界に目を移せば、彼らは、古典の中にある「永遠の価値」に引き寄せられながら、自らのモダ

ン・センスに照らして新しい表現を引き出していく。この伝統と革新の力に、われわれの生活文化のありようも学ぶことができる。

たとえば、国宝源氏物語絵巻の復元模写⁵⁷⁾を行い、描かれた当初の輝かしい作品の姿を再現した日本画家の加藤は、「復元模写の描き手は、原本の示す限られた情報を読み込んだ上で、勝手な思いこみに傾斜せぬよう心しつつ、自分の感性とイマジネーションを総動員して、原本の放つオーラを受け止めようとする」のだという⁵⁸⁾。そのようにして出来た模写は、現代の画家がこの古典をどのように受けとめ、何を学んだかの表現である。古人が行った心細やかな作業を忠実になぞりながら、古人の息づかい、美意識を感受していく。古典の高み、歴史の重みに引き寄せられていくうちに、新たな復元絵巻の美が生み出され、それを見る者にまた、人間の営みへの感動を呼び起こす。

「宇治十帖」の物語を、中世の源氏物語絵巻の表現に想を得て、絵巻の引目鉤鼻の表現に近いホリ・ヒロシの人形を用いて「映像絵巻」の世界・映画《浮舟》を創り上げた映画監督篠田正浩の世界もまた、古典の力が引き出した現代芸術表現世界である⁵⁹⁾。

あるいは、中井による「現代京ことば訳・源氏物語」の訳業も、自然の移り変わりの中に人間の心を重ね合わせた古びとの心を現代に響かそうとする新たな言語芸術の営みである⁶⁰⁾。われわれは、この現代京ことば訳の語りを聞き、日本語の美しさに気づき、よい言葉を語ることの大切さをあらためて思い知らされるのである。

これらの例は、古典の高みに導かれ、伝統の心の柱をしっかりと守った上で、現代なりの芸術表現を表出しようとする営みである。

われわれは、生活文化を築くにあたって、古典の言葉から生み出されたモダンな芸術表現の数々を享受する、という余暇活動の時間を暮らしの中に取り入れることにより、古典を主題とする文化・芸術の享受の世界を拡げ、自らの美意識を磨くことができる。

そればかりでなく、現代の芸術家達が古典の言葉の力に引きつけられて「よいものを生み出す」という営みに、生活文化の精神そのものを学ぶことができるのではないか。われわれは、後世に残るような芸術作品を生み出す芸術家にはなれないかもしれないが、一人ひとりが、「暮らしの芸術家」となることはできるの

である。その折に、古典の力に引きつけられた現代の芸術家たちが、美しいもの、高貴なものを生みだそうとするその姿勢は、「暮らしの芸術家」となるにあたっての心の持ち方への示唆も与えてくれる。古典の言葉に、人が生きることの本質や自らの文化の伝統を学び、その価値に心馴染ませながら自らの美意識も高め、責任をもって新たな自分らしいモダンな生活文化を創出するのである。そのことに気づく時に、古典の価値が身近なものとなるであろう。

4. 古典の魅力に導く方法論

以上、古典が人間の精神の柱を作り、豊かなライフスタイルを作るにあたって、大切なものであることを論述してきた。これらは、本稿が目的とする「暮らしの教養としての文化・芸術教育」の基本理念を形づくるものといえるであろう。

さて、教育においては、力ある古典の言葉に誘うための方法が必要である。そこで大切なことは何か。それは、古典が本当に「力ある言葉」を内包するものであることを実感するという経験をいかにもたらすかということではないか。ひとたび、「これは確かに大切である」「人生の支えとなる言葉である」という内的経験を心深く持てば、それを基盤としながら、自らのペースで人生の楽しみとして古典に接していくという道も開かれることになるだろう。大切なことは、「最初の経験」であり、この「経験」のあるなしが、その後の展開・発展を決定づけることになる。

では、どのように古典の深み、言葉の価値に気づきをもたらせばよいであろうか。

そこでわれわれが知るべきは、日本の上古・中古の時代にあった「魂の感染教育」の伝統である。これは、語られる歌や物語に、そもそも魂が宿っていて、それが語られているうちに、相手の心に宿りその魂が働き始めるという、日本古来の考え方である⁶¹⁾。その伝統を受けて、中古の女房社会においては、将来后妃となるような高貴なる子女の教育に、「物語を語って聞かせる」という方法がとられたのであった。物語はそもそも、「もの（靈魂）の語り」であり、それを語り聞かせることによって、古い物語の中に籠められている魂が、自然に子女の心に入るのである。特に、濃密な叙情内容を持つ歌の中に物語の魂は凝集していると信じられていたため、歌を語って聞かせ、その歌を

暗記させれば、その魂が自然にこの子女達の心の中に流れ込むと考えられたのであった⁶²⁾。『源氏物語』はまさにこうして語られることによって伝えられてきた。子女達は、女房によって語られる日本の伝統の柱を踏んだ物語を聞き、そらんじ、書き写すということを通して、それらの中に内包される日本人の精神を、心の内に取り入れ、心の糧としていった。その際、語ってきかせる女房に力があるのではなく、語られる物語自身、歌自身に力があるのだ。言葉自身に力があるからこそ、それを繰り返し聞くうちに、言葉の魂が内面から働き出すようになるのである。

この「魂の感染教育」の伝統を、われわれの「古典の言葉への誘い」のための方法論に応用して考えれば、最も大切なことは、古典作品の中の、最も印象深い場面を、最も印象深く、正しく手渡していく、という営みとなる。

この「最も印象深い場面」をどう選び取るのか。そこが、「教養としての文化・芸術教育」の要となる。そのためには、長い年月の風雪に耐えた古典の言葉がどのように「人間として生きる」ということの普遍的価値と関わるのかについて、先人たちの解釈に沿いながら、古典の言葉に学び続ける姿勢が、古典の価値へと導く教師の側に大切なこととなる。緻密な専門研究の対象としての古典ではなく、精神の柱を太らせる「教養」として働く力ある印象深い古典の言葉を選び取る。そして、原文の響きに触れながら、言葉が持つ意味の深さと調べの美しさへと正しく誘うのである。

加えて、「印象深い場面」を「印象深く手渡す」ためには、どうすればよいか。ここで活用が期待されるのは、現代のマルチメディア教材やインターネット・コンテンツの数々である。「古典の言葉」から生まれた作品——それは、絵画・彫刻・建築・工芸品・調度品・舞台芸術・伝統芸能・朗読・音楽・映画・衣装デザイン etc. 様々な芸術表現作品がある——の中から、美しく印象深く、また原典の心に正しく沿う努力をしているものを選び取り、古典の言葉と重ね合わせて鑑賞し、原典そのものに触れることへと誘う。現代のハイビジョンの高画質映像の迫力は、鑑賞の魅力を高めてくれることであろう。

5. まとめ

本稿は、生活文化の創造という観点から、暮らしの

教養として生きる文化・芸術教育のあり方を求めての論考を行った。そこで改めて明らかになったことは、古典の言葉が持つ力の重みである。古典は、一般的には日々の生活とは縁のないものと捉えられがちである。しかしながら、「古典の言葉」は、「人間として生きる」にあたっての精神の柱を築くという意味でも、また文化・芸術世界の楽しみ方を広げ、一人一人の生活文化を豊かにするという意味でも大切であることが、本稿を通じて確認された。古典の言葉の中に人間の精神の深さを学び取り、それとの関わりで文化・芸術活動を楽しむ能力を高め、質的生活の創造に活かしていくことは、生涯にわたって深める価値ある時間を創り出すことであろう。

大切なことは、いかに魅力ある形で、暮らしに生きた形で、古典の言葉に接することへの価値へ誘うかということである。大学の教養教育は、高い精神への憧れ、永遠の価値への憧れを育むべき場であり、その役割を十分に果たすべきである。そこでものの見方を身につけた若い人々が、自らの暮らしを築く中でその精神を活かし、一人ひとりが成熟社会にふさわしい生活文化の担い手となることが望まれる。そして、彼らが後に親となれば、子どもにも、言葉を大切に、文化・芸術の楽しみに関わる機会を開き、親と子の新たな生活文化もまた生まれることであろう。

われわれは、「古典の正しい言葉の中に宿る正しい心」⁶³⁾をしっかりと次世代に手渡し、「古典への愛」を育む努力が求められているのである。

【註及び引用・参考文献】

- 1) 三木清が 1941 (昭和 16) 年に発表した論考「生活文化と生活技術」において、文化・芸術を表面的な飾りとしてではなく、内面から楽しむ娯楽が生活文化を形作る上で大切であることが述べられている。三木清：生活文化と生活技術、三木清全集第 14 巻、pp. 384-401 所収、岩波書店、(1967)
- 2) そのことを示唆するデータの例として、土曜・日曜の「趣味・娯楽・教養の行為者率と時間量」を年代別に見ると、特に男性について、20 代には 1 時間 30 分前後ある時間量が、30 代～50 代になると 30～50 分程度になっている。NHK 放送文化研究所：2005 年国民生活時間調査報告書、p.23、2006 年、NHK 放送文化研究所 HP (http://www.nhk.or.jp/bunken/research/life/life_20060210.pdf) 参照。
- 3) 稲垣良典編：教養の源泉をたずねて、p.vii、創文社、(2000)。
- 4) ここでの教養の捉え方は、稲垣編：同上書、pp.v-ix および pp.117-134、に依っている。
- 5) 稲垣編：同上書、p.132。
- 6) 稲垣編：同上書、p.126。
- 7) 今道友信：美の位相と藝術、p.175、東京大学出版会、(1971)。
- 8) 「生きることでなく、よく生きることをこそ、何よりも大切にしなければならない」(プラトン：クリトン 48 B)
- 9) ただ自分が「何をしたか (what I did)」を振り返ることに留まるのではなく、自分が「何であるのか (what I am)」に届くような振り返りこそ、超自然の価値に照らし出される本質的な反省である。今道友信：ダンテ『神曲』講義、p.360、みすず書房、(2000)
- 10) 今道：前掲書、p.175。
- 11) 今道：同上書、p.175。
- 12) 今道：同上書、p.176。
- 13) 今道：同上書、pp.176-177。
- 14) 今道：同上書、p.177。
- 15) 今道：前掲書、p.8、(2000)
- 16) 今道：前掲書、pp.178-179、(1971)
- 17) 本稿において「古典」と使うとき、ここに述べられるような原義に基づく「書物」のことをさす。「古典の言葉」とは、その書物の中に記されている言葉のことをさす。
- 18) 今道友信他：芸術都市の創造、p.237、PHP、(2006)
- 19) 渡部昇一：言語と民族の起源について、p.97、大修館書店、(1973)
- 20) 小塩節他：暮らしの哲学としての生活文化、p.59、PHP、(1997)
- 21) 萱野茂：妻は借りもの、pp.39-40、北海道新聞社、(1994)
- 22) 岡野弘彦：折口信夫伝、pp.121-146、中央公論新社、(2000)
- 23) ホメーロスの『イーリアス』は「憤りを歌え、女神よ」と歌い出されており、詩を歌うのは女神ムーサで詩人ホメーロスはそれを人語に訳す仕事をするのである。それに対して、ウェルギリウスはホメーロスの叙事詩の伝統を踏みながらも、新しい立派なローマ建国の神話(『アエネーイス』)を「私が歌う (cano)」という。つまり「自分が神話を創るのだ」という詩人としての意識の進化が見られる。しかし、その神話は彼が自分勝手に創造するものではなく、「ミューズの女神 (Musa) よ、私に事の由 (causa 英語の cause) を思い起こさせたまえ (memora)」と願い、ミューズの女神が語ることをもとに自分が人語に歌うのだと言っている。ダンテは、このウェルギリウスを詩人の模範として、『神曲』を創るのである。今道：前掲書、pp.55-56、(2000)
- 24) 煉獄とは、地獄でも天国でもない、その中間の「救いの希望」のある所として後世に創出されたものである。Purgatorium (煉獄) という名詞となって確立して一般化するのには 12 世紀末の頃である。煉獄という言葉が現れてからわずか 100 年の後に、ダンテがこれを詩に描いたということの仕事の偉大さが指摘され

- る。今道：同上書、p.306
- 25) 詩人として優れ、かつ思想家としても重要な哲学的内容を提示した人。今道：同上書、p.110
- 26) 代表的なものとして、山川丙三郎、平川祐弘、野上素一、生田長江、寿岳文章ら。今道：同上書、p.108。
- 27) 清新体 (*dolce stil nuovo*) は12世紀の南仏プロヴァンスの宮廷詩人の愛の文芸で、ラテン語ではなく母語(俗語)で作詩された。今道：同上書、p.143。
- 28) 高階秀爾：ダンテ『神曲』とイタリア・ルネサンス(今道友信他：芸術都市の創造、p.68、PHP、(2006)
- 29) 今道：前掲書、pp.10-11、(2000)
- 30) 玉上琢彌訳：源氏物語(第一巻)、pp.20-21、角川ソフィア文庫、(1964、2001)
- 31) 藤原俊成の六百番歌合の判の言葉「源氏見ざる歌詠みは遺恨のことなり」は有名。西村了：知られざる源氏物語、pp.54-58、講談社、(2005)
- 32) 西村了：同上書、pp.46-53。
- 33) 小林秀雄：本居宣長、小林秀雄全集(第14巻)、pp.142-143、新潮社、(2002)
- 34) 岡野：同上書、pp.134-140。
- 35) 「いろごのみ」とは、最も優れた異性を選択することの義。漢語の示す「好色」とは違う。「いろごのみの道徳」とは、折口信夫の提唱した論。折口は、日本の古代人にとって、国の繁栄と安定は、国を治める貴人が、非常に力のある信仰深い女性をより多く選びとって自分の国へ迎えることであり、そこに働く心のあり方が「いろごのみの道徳」であったと洞察した。『古事記』の中の神話的な語りの中にそのありようが随所に見られ、光源氏は、その古代生活の理想を映し出したものである、と解釈した。折口信夫：国文学 第二部日本文学の戸籍、折口信夫全集(第14巻)、pp.216-222、中央公論社、(1976)
- 36) 折口信夫：反省の文学源氏物語、折口信夫全集(第8巻)、pp.303-307、中央公論社、(1976)
- 37) 岡野：同上書、pp.103-140。
- 38) 岡野弘彦：万葉の歌人たち、pp.315-316、NHK出版、(2005)
- 39) 岡野：前掲書、p.291、(2000)
- 40) 岡野弘彦：万葉秀歌探訪、p.53、NHK出版、(1998)
- 41) 岡野：同上書、p.353。
- 42) 岡野：同上書、p.352。
- 43) 町田市立国際版画美術館編：ダンテ『神曲』の旅—描かれた地獄・煉獄・天国、pp.242-247、町田市立国際版画美術館、(2004)
- 44) ペーター・チャイコフスキー：幻想曲《フランチェスカ・ダ・リミニ》、フランツ・リスト：《ダンテ交響曲》など
- 45) ゴダール監督の《アワー・ミュージック》(原題：Notre Musique)は『神曲』を背景においた思想深い挑戦的な映画である。
- 46) 今道：同上書、p.164。
- 47) 今道：同上書、pp.162-163
- 48) 「地獄門碑銘」の語義解釈は、次の文献に拠っている。今道：同上書、pp.164-170。
- 49) 今道：同上書、pp.170-172。
- 50) 今道：同上書、pp.173-177。
- 51) 「もののけ」とは、霊格の低い靈魂を意味する「もの」という語(浄化された霊格の高い靈魂は「たま」と呼ばれる)と、病気の義の「け」という語との熟語であり、「霊の病ひ」が、直にそれを引き起こす凶悪な靈魂を意味する。平安の頃には社会病となり、それを退散させるために修法を要するようになった。「もののけ」の中で、生きている人間の怨念が、その人間の意思により、あるいは意思によらずに、体外に遊離し(あくがる)て、怨みの原動力となっている他人に取り憑くことがあった。これが「生霊」である。「生霊」が描かれた小説は、『源氏物語』において世界でも類がない。六条御息所は、生きては「生霊」となり、死んでは「死霊」となり、光源氏の最愛の人へと効力を及ぼしたが、光源氏その人には、取り憑かなかった。これは、光源氏に対する六条御息所の愛情のゆえであり、このような温かな人情を、もののけの姿に与えたのは、紫式部の創意であり、それは日本人の気質にかなったものである、と折口信夫は論考している。折口信夫：日本の創意、折口信夫全集(第8巻)、pp.272-281、中央公論社、(1976)
- 52) 「うはなりねたみ」とは嫉妬のこと。古代の嫡妻を「こなみ」と呼び、これに対立する第二、第三の妻を「うはなり」と呼ぶ。「こなみ」は「うはなり」をねたむ権利があり、それを「うはなりねたみ」というが、「うはなりねたみ」は単なる個人的な嫉妬の感情というのではなく、公的な、嫡妻の社会的な地位をかけた闘争という性格のものであった。神話の物語の中にもそれが描かれており、たとえば大国主神の嫡妻・須勢理比売は、激しい「うはなりねたみ」を示し、それに対して大国主は魂の力を凝縮させた心細やかな歌を歌いかけて、その怒れる魂を鎮めた(『古事記(上つ巻)八千矛の神の歌物語』)。また、仁徳天皇の嫡后石の日売の「うはなりねたみ」の様子は、「足もあががに嫉みたまひき」と表現されている(『古事記(下つ巻)』)。儒教や仏教の影響を受ける以前の、古代の日本人が理想としたのは、大きな魂を持つ君主であり、そのような君主は、「うはなりねたみ」を受けような者である。多くの優れた妻の「うはなりねたみ」に対処するにつれ、心太くなっていくあり方こそ、貴人の姿だったのである。『源氏物語』は、このような古代日本の貴人の恋の姿を背景に読まなくてはならない。上記のような捉え方を示したのが、折口信夫のいろごのみ論である。西村亮：同上書、pp.79-87。
- 53) 神曲(地獄篇)第32歌124-132に描かれている。
- 54) 神曲(地獄篇)第33歌55-75に描かれている。引用文の訳は今道による。
- 55) 「フィレンツェの像の統一は、その細部の一々に、常にもまして深く広い意味を賦与している。その意味は、芸術作品の細部が作品に組み込まれることによって獲得する意味にのみ、たぐえることができる。芥子の花、金雀枝、秘密のように閉ざされた館、遊ぶ子どもたち、空の青、浮かぶ雲——こうしたすべては、世界のどこでも見られ、どこでも美しいものではあるが、それがここでは、他の土地とはまったく異なった

霊的=美的な重点をそなえ、まったく異なった周辺をめぐらしている。というのも、何ひとつとして、それ自体の美しさだけで人を魅惑することはなく、すべては総括的な全体の美に関与しているのだからである。並列するすべての具象的な要素、自然と精神ばかりでなく、前後に連続する過去と現在をも、フィレンツェとその風景の印象は、さながら一点に凝集させるかのようである」ジンメル（川村二郎訳）：フィレンツェ、ジンメル・エッセイ集、pp.112-113、平凡社（1999）。なお、このジンメルのエッセイとフィレンツェの町の魅力及び京都の風景との関わりについては、次の文献から示唆を得た。芳賀徹：「文学と芸術の森」京都の鳥瞰図（今道他：同上書、pp.79-83）

- 56) 高階：今道他、同上書、pp.68-75
- 57) 歳月による痛みや汚れの風格をそのままに映し描くのが現状模写。それに対して、復元模写はその作品が描かれた当時の輝かしい姿を再現しようとする営みである。
- 58) 加藤純子：復元模写について、よみがえる源氏物語絵巻～平成復元絵巻のすべて～、p.88、NHK 名古屋放送局他、(2006)
- 59) ホリ・ヒロシ：ホリ・ヒロシ人形絵巻（創作市場増刊 10 号）、pp.50-51、マリア書房、(2003)
- 60) 中井和子：京ことば源氏物語、pp.3-21、大修館書店、(2002)
- 61) 折口信夫：短編小説と中編小説と、折口信夫全集（ノート編第三巻）、pp.352-365、中央公論社、(1971)
- 62) 岡野弘彦：短歌による感染教育の提言、うたげの座（第四号）、pp.47-48、不識書院、(1999)
- 63) 岡野弘彦：正しい言葉、正しい心、國學院大學院友会報第 315 号、p.1.(2004)